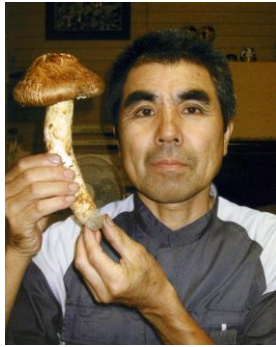


きのこめしの思い出

大畑 隆

「談話会通信 No. 33, 34」は表紙をがらりと変えた。吹春さんの記事の表紙シリーズ [房総の森ときのコ] やきのこのワンダーランドの解説書 [きのこの教え] を読んでいた時、60年ほど前の子供の頃の風景を思い出してしまった。



私が生まれ育ったのは、「下総台地」の北西部の東京に近い東葛飾郡鎌ヶ谷村（現・鎌ヶ谷市）、周囲を松戸、市川、船橋、白井、沼南（現・柏市）に囲まれた人口1万人ほどの小さな農村だった。

地形は、台地が谷津田に囲まれていて、北は手賀沼から利根川へ、東は印旛沼から利根川へ、南は市川の真間川と船橋の海老川から東京湾へ流れる川の源流部であり、分水嶺のようになっている。

家は農家だった。畑と田んぼを持っていたが、山（平地林）は所有していなかったようだ（たぶん）。

暮らしは、農村そのもので、電化製品はラジオぐらいで「三種の神器」等はなかった。

朝の食事づくりから夕方の風呂たきまでの燃料は、すべて「くずつき（松、杉の葉や小枝の言い方で方言?）」や薪、炭等でまか

なっていた。これらは冬場に近所の知人の山から家族で集めてきて、薪割りを手伝ったりした。

当時の農業は機械もほとんどなく、手作業が主だった。堆肥や、苗床づくりには、多くの落葉（クヌギ、クリ、ナラ）等が使われていた。これも山から集めてきたものだった。「落葉さらい（かき集め）」の道具は「熊手と背負かご」を使い、リヤカーで家まで運んでいた。

まさに「談話会通信」や「きのこの教え」に登場するのと同じだった。この道具は現在も使われているようです。

子供の頃の遊びといえば、外で動きまわることが多かった。学校から帰ると夕方まで、畑の仕事や風呂たき等をいろいろやった（やらされた）ので、あまり自由に遊べなかった。

家の近くに谷津田があり、畑の先には林があり、林と田んぼの間には清水が湧き出ていて、小さな流れとなって谷津田の中央を流れる小川に合流していた。ここが海老川の源流だ（たぶん）。この湧水が冷たくてうまかった。

谷津田には名前がついていて、家からみて一番手前が「め谷津（手前の谷津田）」、その先が「ふどう谷津（御滝不動）」、その先は今の県道（船橋取手線）が建設中だったので「ふどう谷津」までが行動範囲だった。

魚とりや、タニシ、ザリガニとりも面白かった。

どちらかというと、林よりも谷津田での楽しみが多かった。林では、春にはワラビ採り、夏は「かぶと、くわがた虫」もいっぱいいた。秋には「あけび、栗」等の食べられるものもいっぱいあったし、きのこ採りも楽しかった。

「きのこ」といっても、「ハツタケ」しか知らなかった。赤や、白いきのこは、「みな毒きのこ」と思っていた。1時間ぐらい歩いて5～6本採れればよかった。採ったハツタケはススキに刺して持ち帰り、「きのこめし」をつくってもらった。香り、味もよくうまかった。

ハツタケ以外のきのこは食べたことがな

かった(たぶん)。「チタケそば」や「チタケごはん」もうまいが、今年は久しぶりにハツタケごはんを食べてみよう(採れれば)。

千葉県から栃木県へ移ったのが40年ほど前になるが、現在、私の生家は数年前に農業をやめた。周辺の平地林や、農地はほとんど消え、住宅地に変わっているようだ。谷津田はどうなってるかわからないが、ドローンでも使って見てみたいものだ。千葉県に入会して、「ハツタケ、アマタケ、ショウロ」が「房総のきのこ御三家」であることを知ったのです。



千葉のハツタケ



栃木のチタケ(チチタケ)



ススキとチダケサシ

籠などの入れ物の準備もなしに子供が林の中で見つけたきのこを壊さずに持ち帰るのはなかなか難しい。大畑さんの文章にはハツタケをススキに刺して持ち帰った思い出が記されている。これに関連する話でチダケサシという茎が硬い植物がある。名前の由来はチタケ(チチタケ)を刺して運んだことによると言われている。チチタケを好んで食料にした地域で使われた名前に違いない。ハツタケもチチタケも共にベニタケ科チチタケ属のきのこである。ベニタケ科のきのこの細胞はほとんど球形なのでポロポロ折れるため食感もあまりよくないと一般に言われている。ところがハツタケは千葉県で、チタケは栃木県でそれぞれ最も好まれるきのこであるから面白い。(文責：山本充弘、写真提供：吹春俊光)



チチアワタケとススキ



チチタケとチダケサシ